

野尻町文化財調査報告書第2集

HIGASI JO BARU

東城原第1遺跡

東城原第2遺跡

東城原第3遺跡

漆野原県営ほ場整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

1987.3

宮崎県西諸県郡  
野尻町教育委員会

野尻町文化財調査報告書第2集

HIGASI JO BARU

東城原第1遺跡

東城原第2遺跡

東城原第3遺跡

漆野原県営ほ場整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

1987.3

宮崎県西諸県郡  
野尻町教育委員会

## 本文目次

第Ⅰ章 序 説.....	1
1. 調査に至る経緯.....	1
2. 遺跡の位置と発掘調査の経過.....	1
第Ⅱ章 調査の概要.....	4
1. 東城原第1遺跡.....	4
2. 東城原第2遺跡.....	10
3. 東城原第3遺跡.....	14
第Ⅲ章 まとめ.....	16

## 挿図目次

第1図 野尻町遺跡地図.....	3
第2図 東城原遺跡群位置図.....	4
第3図 東城原第1遺跡基本土層図.....	5
第4図 東城原第1遺跡遺物分布図.....	7~8
第5図 東城原第1遺跡3号集石遺構実測図.....	9
第6図 東城原第1遺跡出土遺物実測図(1) 繩文土器.....	9
第7図 東城原第1遺跡出土遺物実測図(2) 細石器.....	10
第8図 東城原第1遺跡出土遺物実測図(3) 異形石製品.....	10
第9図 東城原第2遺跡縄文土器出土状態図.....	11
第10図 東城原第1遺跡1号集石遺跡構実測図.....	11

第11図	東城原第2遺跡出土遺物実測図(1) 繩文土器	12
第12図	東城原第2遺跡出土遺物実測図(2) 繩文土器	13
第13図	東城原第3遺跡1号集石遺構実測図	14
第14図	東城原第3遺跡出土遺物実測図	15
第15図	東城原第2遺跡遺物分布図	18~19

## 図版目次

図版1	東城原遺跡群遠景／東城原第1、第2遺跡遠景	20
図版2	東城原第3遺跡遠景／基本土層断面	21
図版3	東城原第1遺跡西半分の状態／東城原第1遺跡東半分の状態	22
図版4	東城原第1遺跡1号遺跡／東城原第1遺跡2号集石遺構	23
図版5	東城原第1遺跡3号遺跡／東城原第1遺跡4号集石遺構	24
図版6	東城原第1遺跡縄文土器出土状態／東城原第1遺跡細石核出土状態	25
図版7	東城原第2遺跡近景／東城原第2遺跡散石の状態	26
図版8	散石除去後検出された集石の状態／東城原第2遺跡2号集石遺構	27
図版9	東城原第2遺跡1号集石遺構／1号集石遺構除去後の掘り込み	28
図版10	東城原第2遺跡縄文土器出土状態と縄文土器／ 東城原第3遺跡1号集石遺構	29

## 例　　言

1. 本書は、漆野原県営ほ場整備事業に伴い野尻町教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は、昭和61年10月6日から12月20日まで実施した。
3. 調査関係者は次の通りである。

調査主体 野尻町教育委員会 教育長 今吉忠義  
課長 梶長弘  
文化財担当 脇村一也

調査員 北郷泰道（県教育庁文化課主事）

特別調査員 西村進（京都大学理学部地質学鉱物学教室）

4. 本書の執筆は、第1章は脇村が担当し、その他は北郷が担当した。
5. 本書の編集は北郷が行った。
6. 火山灰の年代測定については、西村進氏の御指導を受け熱ルミネッセンス分析を進めているが、詳細については本報告において記載する。
7. 集石遺跡構の焼石の年代測定については、前年度に引き続き市川米太氏（奈良教育大学）に御依頼している。

## 序

昨年度に継続して、昭和61年度も、漆野原は場整備事業にともなう遺跡発掘調査を、野尻町教育委員会は、新村・高山に統いて、東城原地区で実施しました。

本年度の発掘場所は畑作地域であり、さといも等の収穫期前であったために、調査開始に困難な情況がありました。生産者や場整備事業関係者の理解・協力を得て、10月初旬から実施できることを、感謝しています。

昨年度も述べましたが「埋蔵文化財の発掘調査は、永眠していた遺跡に、学術的・科学的な解明と保存措置を講ずることであり、ふる里の先人の生活を偲び、歴史のロマンを求める事業」でもあります。

県文化課の専門調査員の御指導と調査作業員の皆様の積極的な御協力により数多くの成果を得ることができました。本年度は第1・第2・第3遺跡と広大な調査領域となりましたが、県内ではこれまで出土例のない縄文早期の深鉢形土器の出土をはじめ、無文土器の良好な状態での出土もありました。本年度は同地域3遺跡の発掘であったため、同じ縄文早期でありながら、土器の様相・石器石材・集石遺構等に、それぞれの違いがみられました。相互遺跡の解明は野尻町はもとより、県内の縄文文化理解にとって、重要で貴重な資料を提供するものであります。

調査は来年度から、紙屋城址周辺の城原地区に移行しますが、紙屋東部地区に生きた古代の先人から中世以降の伊東・島津の抗争前後の地域社会の歴史解明資料ともなる発掘調査となります。御協力ををお願いします。

この調査のために、御指導・御協力をいただきました県教育委員会文化課の皆様や作業に従事していただきました皆様、また御理解と御協力をくださいました大淀川下流土地改良事務所・漆野原土地改良区や発掘地の生産者の皆様をはじめ、関係各機関・各位に心から御礼を申し上げます。

昭和62年3月

野尻町教育委員会

教育長 今吉忠義

# 第一章 序 説

## 1. 調査に至る経緯

宮崎県西諸県郡野尻町において、昭和56年度から漆野原地区の県営圃場整備が行なわれている。それにより、昭和60年度は新村遺跡・高山遺跡の発掘調査を行い、記録保存の措置をとった。昭和61年度も事業区内の埋蔵文化財の調査として、分布調査が県文化課によって行なわれた。

調査により、事業区内に3ヶ所の遺跡の存在が判明したため、大淀川下流土地改良事務所、漆野原土地改良区、県文化課、町教育委員会の4者で埋蔵文化財の保護について協議が行なわれたが、事業施工上現状保存が困難な部分があり、その記録保存の措置をとることになった。これらの遺跡については所在地に因む漆野原第1遺跡、漆野原第2遺跡、漆野原第3遺跡の遺跡名が付され、調査は野尻町教育委員会が主体となり、県文化課北郷泰道主事の担当で昭和61年10月6日から昭和61年12月20日まで発掘調査が行なわれた。

## 2. 遺跡の位置と発掘調査の経過

東城原第1・2・3遺跡の発掘調査は、前年度の新村・高山遺跡と同じく、野尻町漆野原地区の県営圃場整備事業に伴う事前調査として実施した。したがって、その遺跡の歴史的環境については、昭和60年度の概要報告書の中で詳しく述べられているので重複を避け、それぞれの遺跡の位置関係について簡単に触れておくにとどめたい。<sup>(1)</sup>

前年度調査の新村・高山遺跡に対して、本年度調査の東城原の各遺跡は、国道268号線を挟み、漆野原地区の南部に位置する（第1図）。第1遺跡は新村遺跡の東約1kmの国道沿いに在り、古い段階での国道建設により切断されたと考えられるが、北向きの丘陵地の頂点付近に当たる部分に立地すると推定され、現在は国道にかけて切り立った崖の縁辺に在る。

第2遺跡は、第1遺跡のさらに東に約200mの位置にあり、第1遺跡と同じ丘陵上にあるが、反対側の緩やかな南向きの傾斜地に立地する。

第3遺跡は、第2遺跡と小さな谷を挟んだ約300mの南の丘陵地の狭少な南傾斜地に立地する(第3図)。

本年度の調査もまた時間的な制約があり、各遺跡の調査を可能な限り平行して実施したが、それでも時間的には十分とはいえないかった。そのため、各遺跡ともそれぞれの造成深度を検討し、調整を計り、最深150cmまでの調査にとどめた。従って各遺跡の地形的な条件にもよるが、150cm以下、地層的には小林軽石層から下の旧石器時代層については、なお残存する「周知の遺跡」としてそれぞれの遺跡は、今後も取り扱うことになる。

以下、本年度の発掘調査の経過を日誌からの抜粋で記す。

- 10月6日 第1遺跡の調査に着手。重機による表土剥ぎ。丘陵縁辺で焼石出土。
- 10月8日 包含層の堀下げ。ゴボウ作付け用のトレンチャーでの攪乱が著しいが、早くも細石核出土。トレンチャーで巻き上げられた可能性もあり出土層位については要検討。
- 10月13日 押型文土器、条痕文土器、その他チャート片出土。
- 10月14日 引き続いて、チャート製搔器出土。遺物散布図作成。
- 10月16日 細石核及び異形石器出土。確認の結果、土器類と細石核など出土層位は、同時期か否かは別に、同一層位出土と認められる。
- 10月18日 集石遺構検出。
- 10月20日 第2遺跡、表土剥ぎ。
- 10月22日 第3遺跡、表土剥ぎ。
- 10月28日 第1遺跡、縄文早期層について検出完了。
- 11月1日 第2遺跡、焼石検出。
- 11月4日 遺物分布図作成。
- 11月7日 第2遺跡、ピットらしい土色の違いを確認。
- 11月12日 第2・3遺跡もトレンチャーによる攪乱が著しい。第2遺跡では、黒曜石が比較的多く、また吉田・前平式土器の破片も出土。第3遺跡からは、無文土器、押型文土器、ほか剝片多数出土。
- 11月14日 第1遺跡、二回目の堀下げ。第2遺跡、遺物分布図作成。
- 11月19日 第1遺跡、集石遺構実測。第2遺跡、土器集中出土、さらに精査を行う。

第1図 野尻町遺跡地図



- 11月27日 第2遺跡、遺物分布図作成。
- 12月9日 第2遺跡、完全形の集石遺構検出。第3遺跡、遺物分布図作成。
- 12月10日 第2遺跡、集石遺構写真撮影。
- 12月11日 第2遺跡、集石遺構実測。第3遺跡分布図作成。
- 12月15日 第3遺跡、完全形の集石遺構検出。
- 12月20日 発掘区全体図を作成の後、調査終了。

## 第Ⅱ章 調査の概要

### 1. 東城原第1遺跡

#### 遺跡の立地と概要

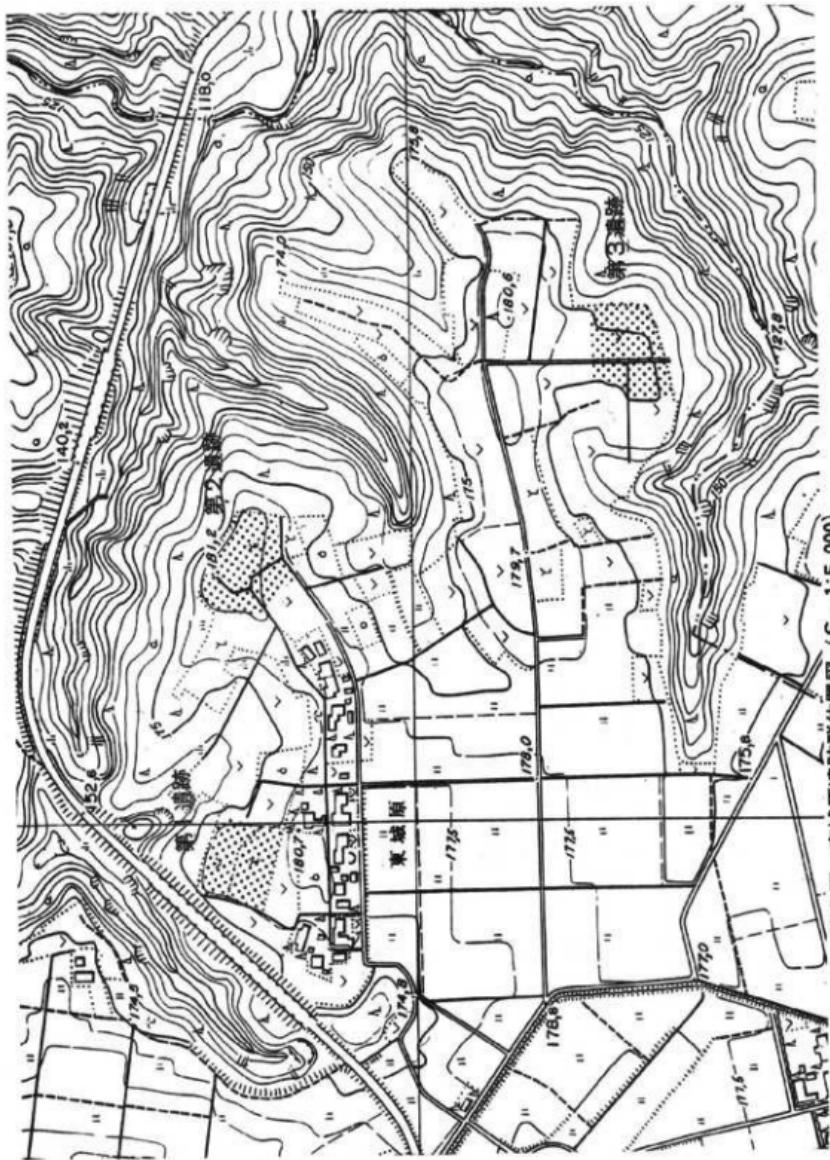
第1遺跡は標高 178m にあり先にも述べたように北側は国道により切られているが、さらに調査区に対して東から浅く谷が入っていたことが発掘の結果確認され、そのため比較的限られた範囲に遺跡は立地していたものと考えられる。

調査区の南に深さ 350cm の土層観察用のトレンチを設定し、基本土層を確認したが、ちょうど谷地形に当たったためか、深さ 300cm 前後で確認されるシラス層 (A T) の替わりに粗く堅く締まったボラ状の層が検出された他は、新村・高山遺跡と同様の土層を確認している(第2図)。



第2図 東城原第1遺跡基本土層図

第3図 東城原遺跡群位置図 (S=1:5,000)



I層耕作土から深さ70~80cmに及びトレンチャーによる擾乱が筋条にはいり、所によつてはV層の下に及んでいる。遺物は、VI層黒褐色土の厚さ40cmから出土したが、出土状態の上からは、縄文土器（貝殻文系土器）と細石器とを分層することはできなかつた。また、以下の層については、先述の通り造成が及ばないことを条件に、新村・高山遺跡で確認されたX・XI層の相当層に包含されるであろうナイフ形石器などの旧石器面の確認は保留されている。

検出した遺物・遺構（第4図）はすべてアカホヤ層以下に限られたもので、縄文早期の押型文、貝殻文などであるが、出土量は少ない。石器では、石鏃のほか、細石核、細石刃それに一見石鏃形をした磨製の異形石器が出土している。なかでも、問題は細石器と縄文土器との共伴であるが、ここでは同一層位からの出土を確認しておきたい。

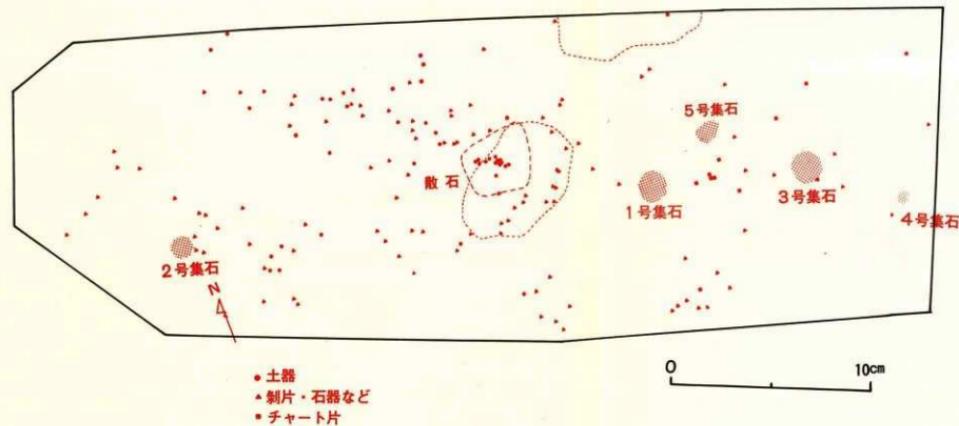
一方、遺構では焼石からなる「散石」と「集石」があり、遺物の多くは散石の上面で検出され、集石遺構は全体で5基確認されている。

遺構・遺物の出土は、北側の地区に限られ、南側へ拡張を行つたが、小さな谷が入っていたとみられ広がりは確認されなかつた。

### 遺構

調査区のはば中央に焼石の散石がみられた。集石遺構は、その東側で4基、西側で1基が検出され、推定される旧地形のなかでは、北の国道側への大きな谷と南の小さな谷に挟まれた東西に延びる馬の背状の地形に生活が展開されていたものと思われる。

不幸にしてトレンチャーの擾乱が殊に遺構の在る場所で著しく、検出された集石遺構にまで擾乱がみられ完全な形を伝えるものはなかつた（第5図）が、掘り込みのはっきりしたものもなかつた。いずれも比較的に小さな5cm大前後の礫石から構成される集石が多く、後に述べる第2遺跡とは異なる印象を与える。



第4図 東城原第1遺跡遺物分布図

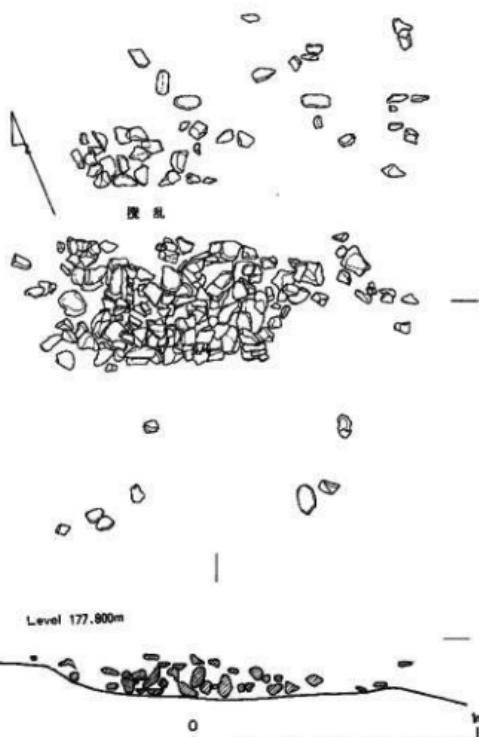
## 遺物

遺物の中で、土器の出土は少なく、散石の上面にほぼ集中している。第6図1は第1遺跡で出土した土器の大半を占めるもので、復元は困難ながら一個体分に近い破片が集中して出土している。器壁は厚く1、4cm程あり、短く押圧に近い貝殻条痕が施されている。胎土には石英砂を含み、色調は赤褐色(7.5 YR 4/6)を呈し、焼成は良好である。

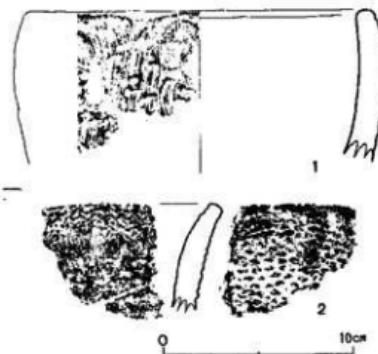
第6図2は押型文土器で、表面には楕円押型、内面の口縁端には山形押型を施している。胎土には石英を多量に含み、色調は黄橙色(10 YR 8/6)を呈し、焼成は良好である。

石器では石鏃が、5点が確認されている。細石器では、問題となる細石核が3個、そのほか細石刃(第7図)が出土している。1は、流紋岩製の船底型の細石核で、下端から側面にかけて粗いものの意識的な調整がみられる。打面調整ではなく、細石刃剥離面は二面認められる。

2も同じく船底型の細石核と見られるが、石質はチャート質で、



第5図 東城原第1遺跡3号集石遺構実測図



第6図 東城原第1遺跡出土遺物実測図(1)  
縄文土器

細かな下縁の調整も顯著でない。打面調整は粗い数回の剥離で形成され、細石刃剥離面は一面である。3は頁岩製で正面觀はU字形を呈するものであるが、細石刃に適した剥離は下縁にみられ、その後側縁から幅広の剥離がおこなわれた核石である。4・5の細石刃はいずれも硬質砂岩であり、上記の細石核から剥離された細石刃ではない。

第8図は一見石鎌形であるが、刃部の形成はみられず、全面に磨き調整が施されている。一方の短辺に切り込みがあり、ここでは異形石器としておく。

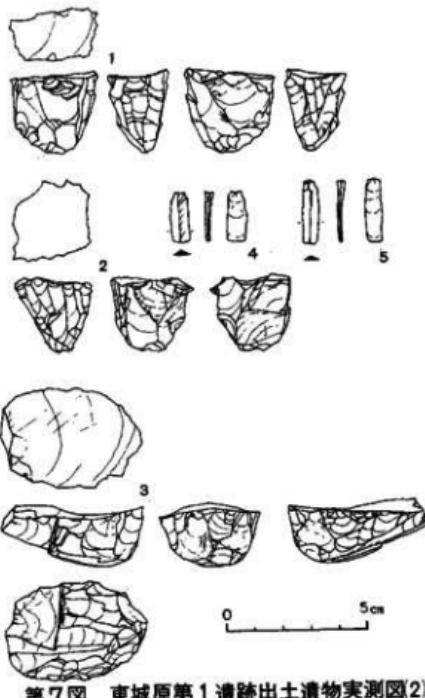
## 2. 東城原第2遺跡

### 遺跡の立地と概要

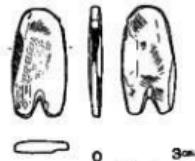
第2遺跡は標高180mあり、南向きの緩やかな傾斜地に立地する。遺跡地としての条件は、本年度の調査地の中ではもっとも良好な場所である。

面的な発掘を目指したが、傾斜地の南側では遺物の分布が途切れ、そのかわり整備された集石遺構が単発で存在した。遺物及び焼石の分布は、傾斜地の最も高い部分を中心に存在したものと考えられる。

検出した遺構は、集石遺構2基と散石、および散石の下に2箇所の集中した礫石が認められた。集石遺構を構成する礫は10cm以上の比較的大振りのものを用いているのに対して、散石および散石下に検出された集石は10cm以下の小振りないしは碎けた礫で構成されるという差異が認められた。



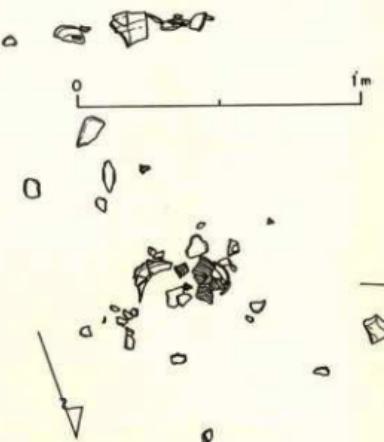
第7図 東城原第1遺跡出土遺物実測図(2)  
細石器



第8図 東城原第1遺跡出土遺物実測図(3)  
異形石製器

散石の途切れた地点で手向山式系の土器が倒立した形で検出（第9図）され、周辺では多数の剝片が集中して認められた。また、押型文の大片は散石に伴い出土しており、多数の剝片も出土している。ほかにチャートの原石がみられ、細石刃も小数ながら検出されている。

Level 179.275m



### 遺構

典型的な集石遺構は2基検出され、本年度の調査遺跡の中でも最も整ったものであった。とりわけ1号集石遺構(第10図)は、掘り込みも最深25cmのしっかりしたもので、底面には長軸20cm大の扁平な石を數いていた。埋め土の中には細かな炭化物が含まれている。

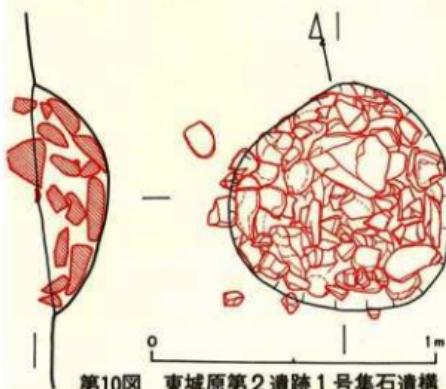
Level 178.895m



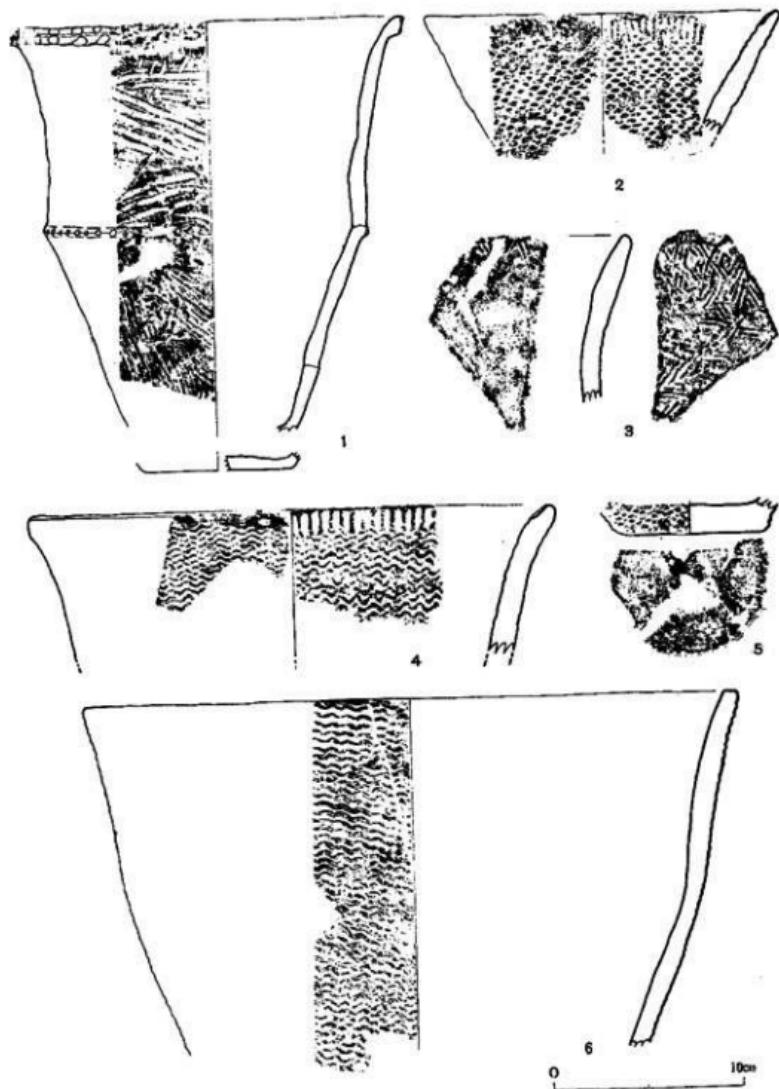
第9図 東城原第2遺跡縄文土器出土  
状態図

### 遺物

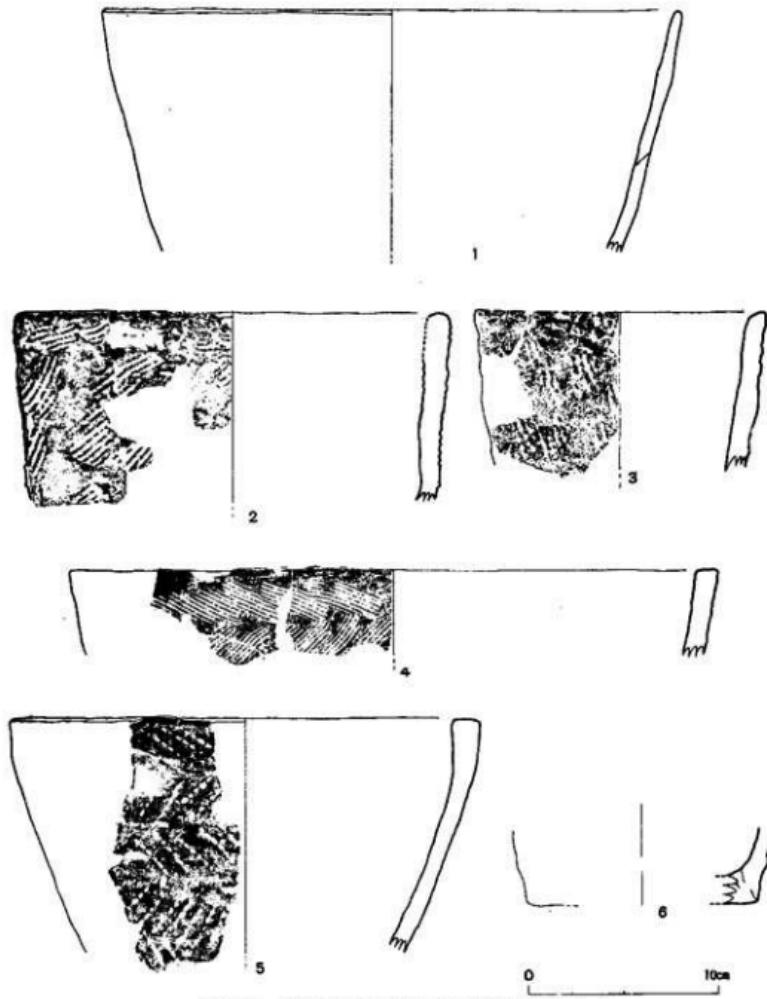
第11図1は唯一完全形に復元できる資料であるが、底部は胴部下端部と直接的な接合面がないため実測図上でも切り離して示している。胴部の中程で「く」字形に屈曲し、口縁部にかけ緩やかに外反する。口縁部と胴部屈曲部が突帯化し、ともに押圧風の刻みが施されている。文様は胴部突帯の上部と下部で異なり、上部は撚糸文の上にやや幅広のヘラ描きが横位、斜位に施され、下部は撚紋のみの施文である。胎土は精選されており、色調はにぶい黄橙色(10 YR 6/3)



第10図 東城原第2遺跡1号集石遺構  
実測図



第11図 東城原第2遺跡出土遺物実測図(2)



第12図 東城原第2遺跡出土遺物実測図(1)

を呈し、焼成は良好である。

第11図2～6は押型文土器である。2と4は楕円と山形の違いはあるが、口縁内面に所謂原体刻文と呼ばれる短条線を施す共通手法が認められるものである。6の

口径34cmと推定される山形押型文土器は、表面だけに文様が施されている。検出された押型文土器に共通した傾向であるが、胎土は砂質が強く、色調も明るく黄橙系を呈している。3はやや乱れた山形押型で、口縁内面にも施されている。

第12図1は無文土器で、薄手に仕上げられている。ナデ調整のみで、胎土は比較的精選され、色調は橙色（10 YR 6/6）を呈し、焼成は良好である。

第12図2～6は貝殻施文土器である。2と4は条痕、3と5は刺突で文様が施されている。6は2の底部と考えられる。全体的な傾向としては、先の押型文に対し胎土の砂質は少なく多くに雲母が含まれるのが特徴であり、色調も暗く褐色系を呈している。

### 3. 東城原第3遺跡

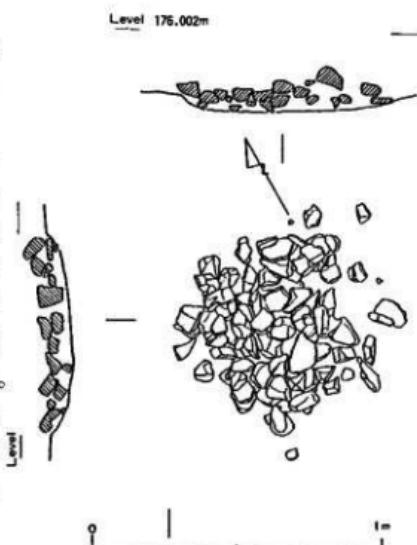
#### 遺跡の立地と概要

第3遺跡は標高176mにあり、南向きのほぼ平坦地に立地している。遺跡の範囲は限られ、標高179mからの傾斜地もアカホヤ層下の追及を行ったが、遺構・遺物の出土は、南端の平坦面に絞られたことになった。それは、現地形でみるより大きな谷によって丘陵の高位部分と遺跡立地部分が区切られていたためと判断され、3遺跡の面的な調査を通じて、アカホヤ層下の地形が現在よりも大きく起伏に富むものであったことが考えられる。

検出した遺構は先の2遺跡と同じく集石遺構と散石であったが、2遺跡に比べて散漫な状態であった。遺物で目立ったのは無文土器と黒曜石の剝片である。

#### 遺構

散石は文字通り散漫で、集石遺構とみなせるものは、2箇所に留まる。1号集



第13図 東城原第3遺跡1号集石遺構実測図

石遺構（第13図）は、平均して10cm未満の比較的小振りな礫から構成される整った造構であるが、下部の掘り込みは明瞭でない。

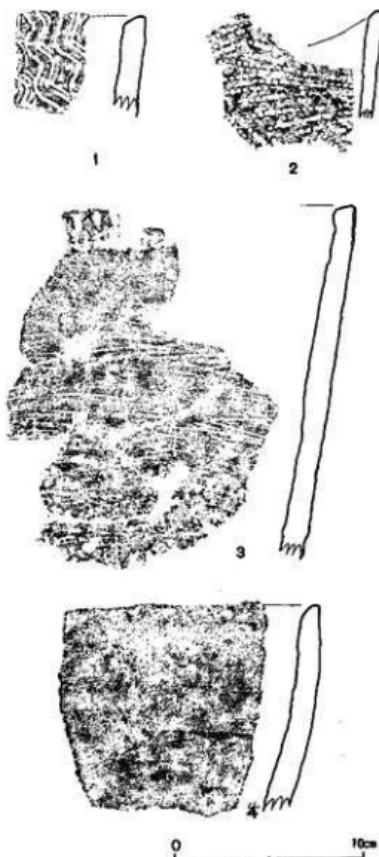
### 遺 物

遺物の出土状態では、黒曜石剝片の集中した分布が数箇所に認められ、その形成については今後分析を試みなければならないであろう。

第14図1は、貝殻条痕系の土器で、波状に施された条痕が特徴である。胎土には雲母が認められる。2は貝殻の刺突による文様施文である。山形口縁を成す。共に明褐色（7.5YR 5/6）を呈し、焼成は良好である。3は貝殻の刺突を口縁端部にもつ深鉢形土器である。胎土には砂粒を多く含み、色調はにぶい黄橙色（10YR 6/3）を呈し、焼成は良好である。4はやや厚みのある無文土器で、

完形の復元は不可能であるが、破片点数および量的にも目立った存在であった。

石英、角閃石を多く含み、色調は橙色（5YR 6/6）を呈し、焼成は良好である。



第14図 東城原第3遺跡出土遺物実測図

## 第Ⅲ章 まとめ

本年度の3遺跡の発掘調査を通じて、昭和54年度の梯遺跡、前年度の新村・高山遺跡で確認された内陸部野尻町の縄文時代早期以下の時代相がさらに解明され、あるいはその分だけより複雑になったと思われる。<sup>(3)</sup>

第1遺跡での問題は、やはり貝殻文系土器と細石核の出土を共伴とみなし得るか否かであろう。図版にも見られるように、ゴボウ作付けのトレンチャーによる搅乱が包含層の上層にまで及んでいたが、それぞれの出土層に搅乱はない。従って、調査の経過の中でも述べたように、最初の細石核を確認した時の下層から巻き上げられたのではないかという疑いは打ち消される。ただし、出土層位に異論を挟む余地があるとすれば、それは散石の形成をどのように捉えるかに係わってこようと思う。貝殻文系土器も細石核もいずれも散石の上面及び上層で確認されたが、散石の形成が廃棄という行為の産物であるとすれば、形成時において多少の搅乱が伴うことが考えられ、その結果同一層位出土として確認されるに至った可能性はある。また、同一層位と捉えても当該期の「同一」には、数百年までの幅が付与されることも考慮されねばならないであろう。

細石器と土器の共伴は、長崎県泉福寺洞穴、城ヶ岳平子遺跡などで隆起線文や押引文、県内では岩土原遺跡で爪形文系土器などと共伴が認められた例があるが、第1遺跡で認められた貝殻文系土器はそれらに比べ時期的に下るものであり、また出土層もアカホヤ層直下ともいえる縄文早期層と規定できる層である。層位関係をそのまま認証することができるとすれば、県内でも最も新しい時期まで残された細石器の資料ということができる。<sup>(4)</sup> <sup>(5)</sup> <sup>(6)</sup> <sup>(7)</sup>

第2遺跡で注目されるのは、手向山式系土器の存在である。器形的にやや長細いものの胴部の屈曲から口縁部にかけて外反するプロポーション、胴部と口縁部に施される刻目突帯文などは手向山式の特徴を伝えるものであろう。しかし、胴部の上部と下部の文様要素にはかなりの異色性がみられる。この資料には押型文は見られず、上部の地文は撚糸文であり、その上をヘラ描きがはしつけている。押型文にしろ撚糸文にしろ回転施文であることを考えれば、文様意識の上での共通性を認めることが可能である。しかし、類例を求めてうえで新たな範疇を設定するに足る特異な様相を認めることができる。<sup>(8)</sup>

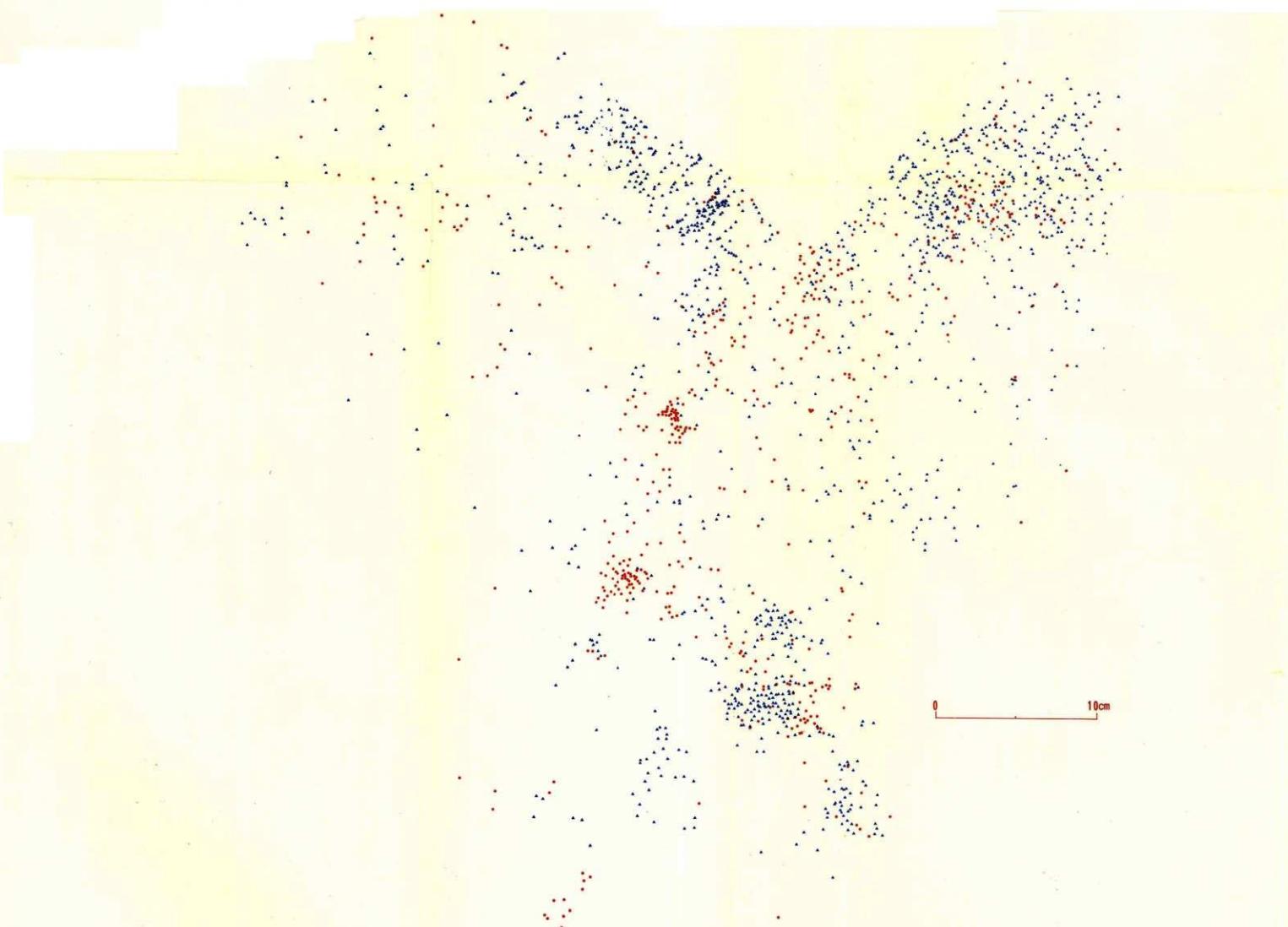
第3遺跡では、顕著に認められた無文土器の位置付けが問題となろう。無文土器は第2遺跡でも出土しているが、県内ではこれまで余り注目されたことのない遺物だけに重要な資料といえる。<sup>(9)</sup>

一方、本年度調査の遺跡全体について、遺物、ことに剝片の出土状態について考慮されるべき課題がある。剝片については、調査時の印象からいえば、第2遺跡にチャートが多く、第3遺跡には黒曜石が多く、径2~3mに集中した剝片の散布は、旧石器時代については「ユニット」ないしは「ブロック」と称される生活面と同じく復元が要求される出土状態であろう。また、遺跡間における異なる石材の出土頻度についても考察が必要であろう。

ともあれ200~300mの間に、谷を隔て、あるいは丘陵地の傾斜面を異にし立地する三つの遺跡を、アカホヤ層下の限られた層位の範囲内での調査ながら、面的に確認し、えた事は、相互の遺跡間に認められた相異について今後に宿題を残すものであろう。

#### (註)

- (1) 日高孝治「新村遺跡 高山遺跡」野尻町文化財調査報告書第1集、野尻町教育委員会(1986)
- (2) 有村玄洋「野尻町新村遺跡にちける土壤調査成績書」註の文献に同じ。
- (3) 面高哲郎「梯遺跡発掘調査」「宮崎県文化財調査報告書」第24集、宮崎県教育委員会(1981)
- (4) 麻生 優「泉福寺洞穴の第七次調査」『考古学ジャーナル』130 (1976)  
同 「泉福寺洞穴の発掘記録」(1985)
- (5) 下川達彌「城ヶ岳平子遺跡」長崎県立美術博物館(1983)  
いまだ充分に生かしきることが出来ていないが、細石器全般について下川達彌氏の御助言・御教示を受けた。
- (6) 鈴木重治「宮崎県岩土原遺跡の調査」「石器時代」第10号(1973)ほか
- (7) 魔鬼島県においても長野真一氏の御教示によれば、細石器と土器との共伴は数遺跡において認められている。
- (8) 手向山式土器と当該土器の位置付けについては、岩永哲夫氏の御助言を得た。
- (9) 橋 昌信「無文土器」「縄文文化の研究」3 (1982)



第15図 東城原第2遺跡遺物分布図（赤は土器、青は剝片・石器）

# 図 版

図版1



東城原遺跡遠景（高原カントリークラブから西をみる）

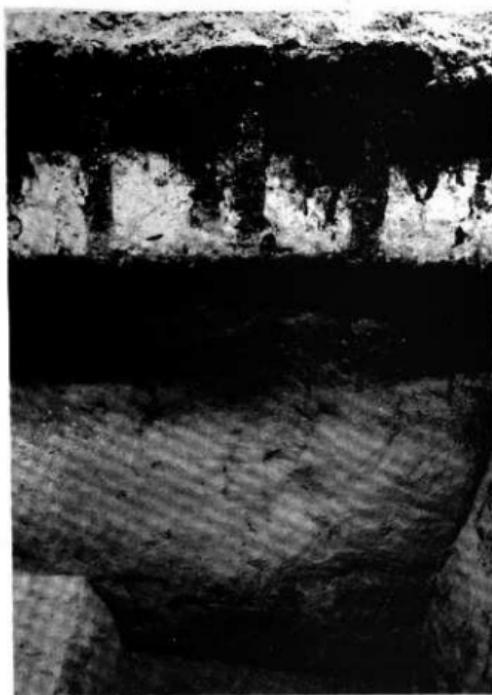


東城原第1（右）、第2（左）遺跡遠景

図版2



東城原第3遺跡遠景



基本土層断面

I  
II  
III  
IV  
V  
VI  
VII  
VIII  
IX  
X  
XI  
XII

図版3



東城原第1遺跡、西半分の状態（東から）



東城原第1遺跡 東半分の状態（東から）

図版4



東城原第1遺跡 1号集石遺構



東城原第1遺跡 2号集石遺構

図版5



東城原第1遺跡 3号集石遺構



東城原第1遺跡 4号集石遺構

図版6



東城原第1遺跡縄文土器（第6図1）出土状態



東城原第1遺跡細石核（矢印）出土状態

図版7



東城原第2遺跡近景



東城原第2遺跡散石の状態

図版8



散石除去後検出された集石の状態



東城原第2遺跡2号集石遺構

図版9



東城原第2遺跡 1号集石遺構



1号集石遺構除去後の掘り込み

図版10



東城原第2遺跡縄文土器出土状態と縄文土器（第11図1）



東城原第3遺跡1号集石遺構

野尻町文化財  
調査報告書第2集

東城原第1・第2・第3遺跡

発行年月日 昭和62年3月

発 行 野尻町教育委員会